

「知りたい」は「治そう」になる 病に向き合うもう一つの場所、患者図書室から

（有田由美子 新潟県立がんセンター新潟病院図書室司書）

多くの患者が自らの病気について深く知りたいと思いながら、あてもない医療情報の海をさまよっている。そうした中で、分かりやすく正確な医療情報を、患者に向けて幅広く提供する図書室をつくろうと活動している病院図書室の司書たちがいる。医師や看護師とは異なる立場で患者の不安と接する病院の司書の仕事について、日本初の患者図書室立ち上げにかかわった新潟県立がんセンター新潟病院司書の有田由美子さんに伺った。

——病院にある図書室について教えてください。

有田 病院の図書室には、メディカルスタッフ用の病院図書室と、患者さん向けの患者図書室の2種類があります。病院図書室は医療法第22条で、地域医療支援病院に必要な施設だと明記されています。また患者図書室は、病院機能評価で患者・家族への医療情報提供に有用だとされています。

しかし、病院図書室はあっても患者図書室はない病院がまだまだ多数を占めています。

日本初の患者図書室 「からだのとしょかん」

有田 新潟県立がんセンター新潟病院の患者図書室は「からだのとしょかん」と言います。広さは約21m²で、医療関連の蔵書は1千冊余りです。1997年、患者さんに医療関連書を提供した日本で初めての独立型患者図書室です。

組織的には病院のサポートケア委員会に所属しています。委員会は医師、看護師、薬剤師、メディカルソーシャ

ルワーカーなどがメンバーで、患者塾や家族塾などの活動をしています。

——図書提供活動自体はもう少し長い歴史をお持ちですね。

有田 94年、病気に関係ない娯楽書の巡回貸し出しサービスから始まりました。この活動は今も続いていて「あかね文庫」と呼んでいます。その頃は、まだ、医療関連書は患者さんが読むものではありませんでした。患者は医師が言った通りに治療を受けていれば良いという考えも色濃かったようです。「あかね文庫」開始から1年後に利用者アンケートを取ったところ、「分かりやすい医学書が欲しい」「退院後の生活について勉強できる本が欲しい」などの希望が出ました。

同時期、病院図書室の司書だった私にアメリカ視察の機会がありました。アメリカの司書は患者と家族への対応だけでなく、公共図書館と連携して利用者の問い合わせに答えていました。また、Clinical Librarian（臨床図書館員）は、医療スタッフと一緒に病床へ行き、情報を提供していました。司書には、医学と情報科学の両方が必要だと思いながら帰国しました。

「からだのとしょかん」は当初、病院の会議室を毎日一定時間借り、移動書架で本を運び込む形で始まりました。患者さんにもなかなか好評でした。99年によりやく現在の独立型常設図書室になりました。

——図書室のスペースはどのように得られましたか。

有田 もとは喫煙室でした。院内全面禁煙化に伴って空いたスペースをもらいました。だからとても狭いのです。禁煙化の波で、他病院の図書室でも同じ例がよくあるようです。

——患者図書室開室に当たって、周囲の理解には恵まれましたか。

有田 メディカルソーシャルワーカーと各病棟の看護師長を回って意見をもらい、協力をあおぐことから始めました。福祉団体からの補助金も得て、本を買いそろえました。スタッフについては、新潟ホスピス・ボランティアの会の方々に、活動していただいています。貸し出しなど事務的なことはボランティアさんが、選書は私が担当します。患者さんから病気に関する具体的な相談をされた場合は、必要に応じて医師やケースワーカーに相談します。

——病院内の反対はなかったですか。

有田 喫煙室を患者図書室にすることに反対はありませんでした。ただ、医学書を患者図書室に置くことについては、前もって院内のインフォームド Consent 委員会に諮りました。患者さんに対するインフォームド Consent になると説明したのです。患者さんが医学書の内容を誤解することもあるのでは、と心配する声もありましたが、利用者には注意書きを渡すということで、了承を得ました。

患者の意識変化とともに 毎年1000人の利用者増

——利用状況はいかがですか。

有田 2004 年は、開室 194 日間で入室延べ 6300 人、内訳は男性 2594 人、女性 3706 人でした。1 日平均にすると 32 人が入室しています。また、貸出冊数は 1281 冊、1 日平均 7 冊です。6 年前、利用者 110 人にアンケートを取りました。何を知らなくて来室したかという問いには、74%が病気について知りたいという結果でした。他には

29%が治療について、25%が退院後の食事や生活、以下検査、薬、手術と続きます。また、必要とした資料があったかとの問いには、84%が十分あったと答えています。

書籍の提供だけでなく、白血病で口内炎ができる患者さんに何を食べさせればいいのか調べたいというご家族には栄養課を、肺癌で自暴自棄になっている患者さんへの接し方を知りたいというご家族には病院主催の患者塾をご紹介

介する、といったこともしています。

また患者さんの中には、病気のことを調べながら図書室のボランティアさんと話をするだけで、気分が落ち着くという方もいらっしゃいます。

——利用者は増えていますか。

有田 毎年 1000 人くらいずつ増えています。患者さん自身に病気について勉強したいという意欲が高まってきているからだと思います。自分の病気を知って、自分で治療法を決めたいと考えるのは、若い人だけではありません。70 歳代くらいの年配の方もよく図書室に来られます。

——利用者のために工夫していることはありますか。

有田 昨年、「お調べカード」をつくりました。これは①診察の際に医師が病名や治療名を書く②患者さんが自らのことを調べるために病名などを医師に書いてもらう③医師が患者さんに役立つ本を書き込む、などして使うものです。本を通して医師と患者さんが交流してくれればと考えてつくりました。あまり使われていないのが残念ですが、休憩スペースやナースステ



有田由美子

ありだ ゆみこ

新潟県立がんセンター新潟病院図書室
司書

山形県生まれ

山形県立米沢女子短期大学卒業

1976 年新潟県立がんセンター新潟病院
図書室司書

1997 年同患者図書室司書兼務

2004 年病院図書室研究会患者医療図書
サービス支援事業担当

医療関連書を利用する際のご注意

体に関する本をご利用になる時は、下記のことにご注意してお読み下さい。

- 1) これらの医療関連書の提供は、決して特定の本の内容や、治療法などを薦めている訳ではありません。
- 2) これらの医療関連書で得た、疑問への解答は、ごく一部分の解答でしかありません。
- 3) これらの医療関連書の内容は、必ずしもあなた自身の状態と、完全に同じではないかもしれません。
- 4) これらの医療関連書は、あなたと担当の医師と、より具体的な話し合いをしていただく材料としてご利用いただければ幸いです。

県立がんセンター新潟病院 からだのとしょかん

ションのカウンターなど目立つ所に置いています。

——医師の協力態勢はいかがですか。

有田 「分からないことがあれば図書室で聞いてみたら」と紹介して下さる医師もいますが、まだまだこれからです。「お調べカード」をつくった際、「からだのとしょかん」用推薦図書を挙げていただくことと、不要になった本の寄贈をお願いしましたが、協力して下さった先生は少数でした。

——「からだのとしょかん」には、医療スタッフも来ますか。

有田 どんな本があるのかと見に来て、所蔵本の記述に医学的な間違いを見つけたり、古い本に「今はこうじゃないよ」と指摘して下さる先生もいます。そうした先生には、本に正しい情報と先生の名前を書き込んでいただきました。

医療スタッフと 患者を本でつなぐ

——大規模病院がリニューアルと同時に立派な患者図書室をつくる例も増えています。

有田 病院図書室研究会の04年の調べでは、同会会員の92施設のうち患者さんに図書提供をしているのは49施設で、さらにそのうち29施設が医療関連図書を提供していました。29施設の図書室の平均は広さ51m²、蔵書数438冊、年間予算30万円でした。——年間予算30万円は少なくありませんか。

有田 「からだのとしょかん」の場合はもっと少ないです。いずれにしても非常に厳しいです。病院にとっては採算増につながる場所でもないですから、難しいですね。ただ、退院される方が寄

付金を寄せて下さったり、研究費をいただくこともあります。

——所蔵本はどのように選びますか。どのような注意を要しますか。

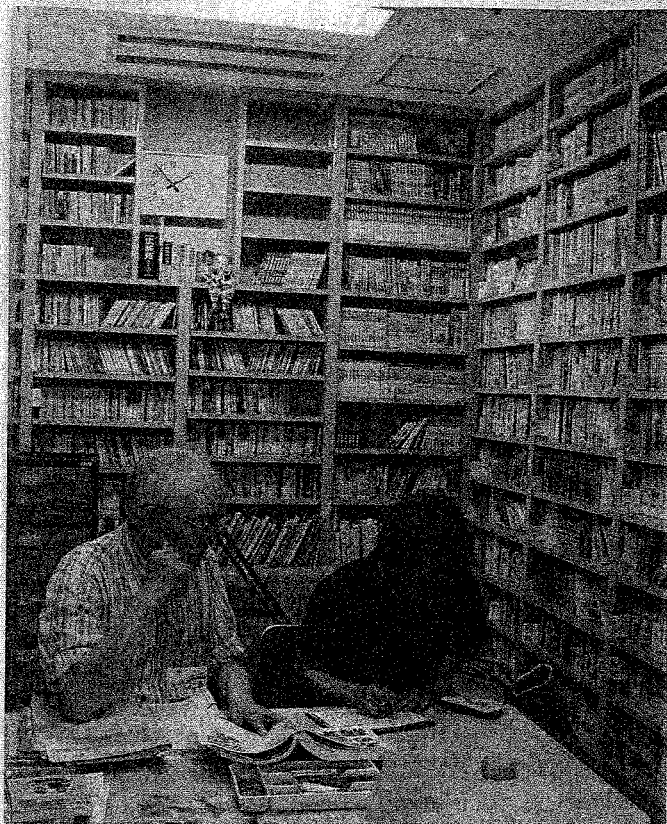
有田 医学関係のしっかりした出版社の本を買うことです。ただ、医学専門出版社でも、著者が医師でも、「こうすれば治る」というような極端な趣旨のものは避けます。民間療法を紹介する本の場合は、ある一つの

療法だけを薦めるものではなく、網羅的に解説している本にします。

——娯楽書の提供はしていても、医療関係書を提供している病院は多くないですね。

有田 原因はいろいろだと思います。患者さんが医療情報を得るのは害になると危惧しているドクターも、まだまだいます。もちろん予算の問題もあります。スタッフの手が回らないということも、図書室をつくる場所がないということもあるでしょう。

でも、「からだのとしょかん」を利用されたある70歳代の男性は、「自分で本を借りて調べると、自分でも病気を治そうという気持ちを持つことができます」という感想を寄せて下さいました。患者図書室はインフォームドコンセントの大事な手段の一つであり、患者さん中心の医療への大きな支援にもなります。感想を寄せて下さった患



者さんのように、自分で知識を得ることは治療意欲にもつながるのではないのでしょうか。

——患者図書室にとって大切なことは何でしょうか。

有田 司書がいるということです。司書を置かずに病院管理部が図書室を管理するところもありますが、本の専門家である司書がかかわるべきです。患者さんが調べたいことは多岐にわたりますし、本だけではなく様々な情報も欲して来られますから。

また、悩みを抱えて来室される患者さんのために、院内の各部署と連携することも大切です。図書室は小さくても、図書室と院内をつなぐ核になる人が必要で、それを本の専門家であり、病院のスタッフでもある司書が行うことが大事だと思います。

——本日はありがとうございました。

(聞き手 館野綾 本誌)